

## 6. 研究成果をとりまとめる上での問題点

国際共同研究も含めた本研究の研究手順は、観測によるデータ取得、その解析、データを用いたモデルの改良というシナリオであった。しかしながら、現地カウンターパートとの協力関係の構築の難しさ、海外遠隔地における観測研究の難しさ、などから観測データの取得・解析にこのほか多くの時間と人的資源を取られ、また、上記の研究手順のそれぞれは必ずしも並行することができないこと等から、計5年間という時間が研究成果にとっては大きな制約であったことは否めない。特に、モデル研究にこのしわ寄せが来てしまったことは否めない。また、長期的なモニタリングのように、5年以上の長期に渡る観測研究を経て成果の出る研究もある。本研究終了後、各班・各研究グループ毎に、別途研究資金を獲得してそれぞれの研究を継続していく必要がある。

各地域での観測研究が中心であった GAME 国際共同研究を引き継いだ当初は、地域研究グループ内での研究者間の結びつきが強く、地域研究グループ内での研究連携が強かった。また、データ公開の遅れなどから、本研究領域全体を対象とするような広領域研究のスタートも遅れていた。本研究の中盤から後半にかけて、意識的に地域を横断した研究「クロスカッティング」を奨励するよう努めた結果、そのような研究をしようというグループがいくつか形成され、成果も見られるようになってきた。たとえば、北方林と熱帯林の熱・水収支の生態学的な比較やユーラシア大陸全域での水・エネルギー収支研究などである。しかしながら、クロスカッティング研究は始められたばかりであり、このような研究の進展には、今後の研究支援がさらに必要である。

長期的なモニタリング観測などのように、長期的な研究期間を経て初めて、高い価値のある研究成果が現れる研究がある。このような研究の推進には、長期的な視野に立った財政面・人材面での研究支援が必要である。